

実践報告

言葉の分類を通じた説明的文章の読みの深まりに関する考察 — 中学校1年国語科「さまざまな視点から見つめよう」の授業分析を通して—

原口 直哉*

A Consideration on Development of Explanatory Text Reading through Word Classification: Through an Analysis of the First Grade Japanese Lesson "Let's look around from the various Viewpoints"

Naoya HARAGUCHI*

【要約】

説明的文章において、筆者は、読み手を納得させるために、さまざまな述べ方の工夫を行う。逆に言えば、述べ方の工夫が分かるということは、筆者が文章を通して伝えようとしていることのより明確な理解につながることになる。そこで、筆者のものの見方や考え方をつかむために、キーワードを4象限図で分類し、文章の構成や論の展開を捉える授業に取り組んだ。

【キーワード】

段落どうしの関係、文章構成、対比、話し合い、4象限図

1. はじめに

説明的文章を読むときの読む内容として、「論理的思考力を育てる説明文の授業」(藤田, 2009)の中で、「書かれている事柄」「筆者の述べ方」「筆者のものの見方、考え方」が挙げられている。この中でも、ただ単に書かれている内容をつかむだけでなく、筆者が読み手を納得させるために、どのような工夫をしているか「筆者の述べ方の工夫」をつかむことは、国語科の学習として重要なことである。また、説明的文章の表現方法(頭括型・尾括型・双括型、質問・解答法、列挙法、対比・類比的方法等)を知っておくことは説明的文章の正確な読みにつながると同時に自分が説明する立場になったときにより適切な方法で伝えるべきことを表現できることにつながってくる。

本研究の主教材である「オオカミを見る目」では、人の考えや行いが、置かれた社会の状況によって異なったり、変化することを、日本とヨーロッパ、江戸中期までの日本とそれ以降の日本との対比で述べられている。筆者の述べ方の大きな特徴として、二つの対比を軸にしながら「オオカミを見る目」が語られているところが挙げられる。

2. 単元の概要

本単元の展開部では、「オオカミを見る目」の各形式段落の働き（「導入」「問い」「答え」「補足」「まとめ」等）を考え、文章構成図を作成した。文章構成図を作ることで、内容と共に筆者の述べ方の特徴をつかんでいった。読み手を引き込む「問い」と「答え」の多用や、「オオカミを見る目」の違いを明確にする二つの対比、そして、具体的な説明の後のまとめ等が、分かりやすく伝えるための工夫として挙げられる。最後に、小学生に向けて、附属中学校を説明する文章を対比を使って書かせ、文章の様式を意識することが、分かりやすい説明につながることを学ばせた。

本単元の展開部中程で、「『オオカミを見る目』の述べ方の工夫を探ろう」という学習課題を設定した。オオカミを言い換えた言葉や扱われ方を表す言葉を見つけ、短冊に書き4象限図に貼ることで分類をさせた。縦軸を「現代」「昔」、横軸を「日本」「ヨーロッパ」とした。また、4象限図をもとに、対比における筆者の工夫を、話し合い活動を通してつかませた。

単元の授業過程は以下に示す通りである。

<p>全5時間</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 本単元の課題「分かりやすい説明とは？」を知り、学習への見通しをもつ。(1時間) 〈短作文を書かせ、説明することに関心をもたせる。〉 2 各形式段落の働きをつかみ、文章構成図をつくる。(1時間) 〈文章構成図を作ることで、筆者の述べ方の工夫を考えさせる。〉 3 筆者の述べ方の工夫をつかむ。(1時間) 〈4象限図をもとに、対比を用いた筆者の述べ方の工夫をつかませる。〉 4 小学生に向けて附属中学校の説明文を書く。(1時間) 〈対比を用いて説明文を書かせる。〉 5 学習の振り返りをする。(1時間) 〈小学生に書いた説明文を回し読みさせ、相互評価をさせる。〉
--

3. 授業の実際

(1) オオカミに対する見方を表した言葉を確認する。

文章の中からオオカミを言い換えた言葉や扱われ方を表した言葉に印をつけさせ、その中から一つを選び短冊に書かせた。生徒達は以下に示すような言葉を短冊に記入した。

<ul style="list-style-type: none"> ・ ずる賢くて悪い動物 4名 ・ 悪魔 2名 ・ 恐ろしい魔物 2名 ・ 残酷で悪い動物 3名 ・ 悪を象徴する生き物 4名 ・ 悪者 1名 ・ 忌まわしい動物 6名 ・ 害獣 3名 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大神 3名 ・ 賢い動物 1名 ・ 自分たちの味方 3名 ・ 神 7名
生徒39名	

多くの生徒が、日本とヨーロッパ、現代と昔のそれぞれからオオカミに対する見方を表した言葉を見つけ、印をつけることができた。

(2) オオカミに対する見方を表した言葉を分類する。

資料1のように、生徒が書いた短冊を4象限図で分類し、対比を用いた筆者の述べ方にさらなる工夫がないかを探る手がかりとした。4象限図を用いたのは、「オオカミを見る目」が、日本とヨーロッパ、現代の日本と昔の日本という形で、日本を基準とした2つの対比で説明されており、内容をまとめる上で、4分割できる4象限図が有効と考えたからである。また、資料2のように、短冊の上段には、自分が選んだ言葉が書かれていたページ数を書かせ、文章構成を考える上でのヒントとした。

資料1 4象限図での分類



資料2 短冊へのページ記入



(3) 筆者の述べ方の工夫をつかむ。

黒板に貼った短冊をもとに、4人1組のグループをつくり、「二つの対比を用いた説明で筆者はどんな工夫をしていますか。」について話し合い活動を行わせた。ここでは、表1のように、話し合い活動の顕著な例として4班と7班をとりあげる。特に4班の「昔の日本と昔のヨーロッパ」の比較と現代の日本を比べた捉え方は、他の班でも多く見ることができた。

表1 4班と7班の話し合い活動の概要

4 班	7 班
<ul style="list-style-type: none"> ・「昔の日本と昔のヨーロッパ」の比較と現代の日本を比べている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「昔の日本と昔のヨーロッパ」の比較と「昔の日本と現代の日本」の比較を比べている。 ・「昔の日本と昔のヨーロッパ」の比較が述べられたあとに「昔の日本と現代の日本」の比較がきていることに16段落と結びつけて気づいている。

(3)-1 4班の交流

この班は、メンバーの仲が良く、話し合い活動が活発に行われると予想された。メンバー全員がよく発言し、昔の日本と昔のヨーロッパの対比を行うことで、現代の日本の状況がはっきりしてくると結論づけた。昔のことを知ることで現代が見えてくることに気付いてはいるが、日本におけるオオカミの見方の変化や2つの比較の順番がなぜそうなっているのかの視点がやや薄いと感じられる。ある程度分かっているが、黒板に貼られた2つの対比が十分に生かされているとは言えない。

T : 教師, K 1・K 2 : 生徒

T 工夫なんだと思う。

K1 あえてヨーロッパと日本を比べることで、昔の日本とヨーロッパの違いを明確に表している。

T できましたか。

K1 できました。

K1 あえてヨーロッパと比べることで、現代の日本を明確に表している。

T もう一回。

K2 私が言う。昔の日本とヨーロッパを比較することで、現代の日本のオオカミへのイメージを明確に表している。

T ここを対比してここを表している？

K2 そうです。

K2 対比っていうの？

T 日本とヨーロッパを対比させることで…。明確になっている？

K2 できた。明確にしている。

K2 あえて昔の日本とヨーロッパを対比することで、現代の日本のオオカミに対する見方を明確にしている。

昔の日本と昔のヨーロッパの比較によって、現代の日本におけるオオカミに対する見方が明らかになったと結論づけている。2つの比較のうち、昔の日本と昔のヨーロッパの比較は、一括りとしてとらえられているが、昔の日本と現代の日本の比較は、切り離されて、現代の日本だけに目が向いている。そうになると、筆者の考えである「人の考えや行いは、置かれた社会の状況によって異なる。」という部分は見えてくるが、「変化もし得るのだ。」という部分が見えにくくなってしまふ。Tの発言「ここ（昔の日

本と昔のヨーロッパ)を対比してここ(現代の日本)を表している。」の後に、「現代の日本を明確にしているのは、昔の日本と昔のヨーロッパの比較だけだろうか?」という問いかけをし、現代の日本は、昔の日本が変化して存在していることに目を向けさせる必要があったと考える。

(3)-2 7班の交流

この班は、言葉の一つひとつに目を配り、落ち着いて文章を読み解いていく生徒が多い。男子Iは、話し合い活動の早い段階で、二つの対比の順番と形式段落16の内容とが結びついていることに気がついていて。二つの対比の順番は、昔の日本と昔のヨーロッパの対比から昔の日本と現代の日本の対比になっている。形式段落16の内容は、前半にオオカミに対する日本とヨーロッパの見方の違いが書かれ、「そして、更に注目されるのは、」として、後半に日本におけるオオカミのイメージの変化について述べられている。筆者の伝えたいことが、二つの対比の順番に反映されていることに気づき、班全体で共有することができていた。

T : 教師, N・I : 生徒

N どんな工夫をしていますか?

I 日本とヨーロッパを比べて、そこから後半は、今と昔を比べて180度回転した。後半は昔の日本と…。

N 前半は、日本とヨーロッパを比べ、後半は、昔と今を比べている?

I 第1ステップは、ヨーロッパと日本で違うのかの説明で、16段落の「そして」の前、ここまで。ここから同じ上下だとしても社会の状況が変わることによって変わること。

T これ(ワークシートの4象限図)はなんでこうなっているの?

I 前半言いたかったことが、16段落の「そして」の前までのまとめ。ここからここ(4象限図の現代と昔における日本の対比部分)までが「そして」から始まる場所。

T ここ(形式段落16の「そして」から後の部分)を言いたいためにここ(4象限図の現代と昔における日本の対比部分)を後に言ったということ?

I はい。

このやりとりの後、話し合いでの発言が少なかった男子Kは、ワークシートに次のような内容を記入していた。「前半で日本とヨーロッパを比べ、後半で日本の現代と昔を比べている。まとめにつながるために工夫した。」NやIの会話の内容を参考にしながら、対比の順番と形式段落16との結びつきを意識して工夫点を書くことができていた。

(3)-3 全体での交流

班での話し合いが終わった後、「二つの対比を用いた説明で筆者はどんな工夫をしていますか。」について全体で意見交換を行った。4人の発表者から次のような意見が出された。

- ① 場所や時代ごとのイメージが書いてある。
- ② 日本とヨーロッパの比較をしてから、現代と昔の比較をしている。
- ③ 良いこと悪いことが書いてある。
- ④ ヨーロッパの現代が書かれていない。

4つの意見の中で、④②について全体に理由を問いかけてみた。④については、「オオカミに対する見方は、ヨーロッパでは昔も今もかわらないから。」「日本のことが大切であり、ヨーロッパのことは重要ではないから。」という答えが返ってきた。②について質問すると、②の答えを言った生徒とは別の生徒（②の答えを言った生徒とは班も違う。）が、「16段落に関係している。16段落は、前半が、日本とヨーロッパのことであり、「そして」を挟んで、後半が、昔の日本と現代の日本のことになっている。16段落の筆者のまとめが反映されて、日本とヨーロッパの比較から現代と昔の比較になっている。」という返答があった。授業者が導き出したかった2つの意見（現代のヨーロッパが書かれていない。日本とヨーロッパの比較のあとに日本の昔と現代の比較がきている。）がすぐにでてきた。現代のヨーロッパが書かれていないことについては、すぐに意見がでてくると予想していたが、日本の昔と現代の比較が後になっていることに気づく生徒が班での話し合いで複数出てくるとは考えていなかった。今回は、授業者側のねらい通りの答えが返ってきたが、返って来なかった場合にどうするかが本授業での大きなポイントとなる。あらかじめ考えていたのは、16段落に着目させることであった。16段落の2つの内容「オオカミに対する見方が異なる」「オオカミに対する見方が変わる」に気づかせて、それが2つの対比の順序と一致していることに結びつけていくやり方である。ただ、その方法だと言葉の分類を行ったことが十分に生かせなくなってしまう。本授業の後に、他のクラスで行った実践では、言葉の分類を再確認することで、生徒が対比の順序に気づくことができた。発問と返答のやりとりは、次の通りである。

- T それぞれの部分に貼られている短冊を見て、何か気づくことはありませんか？
- T ページ番号に注目してみてください。
- T それぞれの枠ごとにどんなページ番号が多いかな
- S 順番になっている。
- T どんな順番になっている。
- S 右下から左上へLの字になっている。
- T 2つの対比に置き換えて考えると。
- S 日本とヨーロッパの対比から日本の現代と昔になっている。

(4) 筆者の思いをつかむ。

2つの対比を用いた説明で筆者がどんな工夫をしているか確認した後に、「4象限図の4つの枠の中で筆者の思いが一番強く向けられているのはどこだろう。」ときいたところ、クラスの生徒が一斉に「現代の日本」と答えた。この後「現代の日本に重きを置いた対比になっているのはなぜだろう。」という発問を行った。生徒のワークシートには次のような記述がされていた。

- ・これからの私たちにどうあってほしいかを言うため。
- ・時代や状況によって人の考えが変わるのを知ってもらうため。

- ・人間の都合でいろいろなことが起こっているのを伝えるため。(シカの急増)
- ・人のせいで自然がおかしくなっていることを伝えるため。
- ・生き方について考えさせるため。

多くの生徒が、筆者のまとめの部分から「時代や状況によって人の考えが変わることを知ってほしかったから。」と記述していた。また、「自然界のバランスが崩れてきているため。」であったり、14段落に出てきた「シカの急増」という言葉から「シカの急増を防ぐため。」という自然界におけるより具体的な問題の解決を促そうとする筆者の思いが込められていることを述べる意見もあった。いずれにせよ、これからの未来を作っていく現代を生きる私たちにメッセージが送られており、現代の日本に重きを置いた文章になっていることは、生徒一人ひとりがよく理解し感じ取っていた。

4. 言葉の分類を通した読みの考察

本時の指導目標は「筆者の述べ方の工夫について理解することができる。」である。述べ方の工夫を探る方法として、4象限図を用いた言葉の分類を行った。よって、本研究の考察のポイントは、「『筆者の述べ方の工夫』を探る方法として言葉の分類が有効であったか。」を検証することとなる。指導案での本時の展開部でいうと、4「オオカミに対する見方を表した言葉をまとめる。」[⑩分類する]、5「筆者の述べ方の工夫をつかむ」[⑫話し合う]の部分が該当する。

4-1 「オオカミに対する見方を表した言葉をまとめる」[⑩分類]について

今回、言葉を分類するにあたって4象限図を用いた。これは、日本とヨーロッパの比較と現代と昔の比較という2つの対比軸を必要とする分類だったからである。ただ、生徒達は、小学校の時に1組の対比を扱った説明的文章しか学んでいない。2つの対比がでてきて、それを4象限図にまとめたとき、見方に戸惑った生徒もいた。特に、左下の昔の日本が、昔のヨーロッパと現代の日本の両方に関わっていることをアドバイスしないといけない生徒もいた。4象限図の見方についてはもう少しでいいいに確認する必要があった。

4象限図への言葉の提示は、短冊を用いた。オオカミの見方を表した言葉に印をつけさせ、そのうちの1つを選び短冊に記入させた。また、短冊上部に選んだ言葉のページ数も書かせ、対比の順序が分かりやすいよう工夫した。今回、オオカミの見方を表した言葉を見つける際、本文の全てを対象とした。その結果、オオカミを肯定的にみる言葉と否定的にみる言葉が入り乱れ、4象限図にまとめた後、対比の順序性が分かりにくくなってしまった。結論に導くための本論部分に絞って言葉選びをさせるのも1つの方法だったと考える。

[⑩分類]での反省として、4象限図を見ることで2つの対比の順番が分かってくる提示の仕方を考えるべきであった。電子黒板を利用した4象限図の見方のアドバイスや選ぶ言葉の絞り込み等が挙げられる。

4-2 「筆者の述べ方の工夫をつかむ」[⑫話し合う]について

話し合い活動を行うにあたって、「自分の考えを伝えるために、筆者は、2つの対比を使った説明でどんな工夫をしているだろう。」という発問を行った。各班の話し合いでは、次の2つのパターンが目立った。1つ目は、話し合いの目的がはっきりしていないパターンである。班によっては「内容の工夫」か「伝え方の工夫」か生徒同士で確認し合う場面があり、何を考えれば良いのかメンバーで迷っている状況であった。話し合い活動の前に発問をしっかりと伝えておくことはもちろん、途中段階でのいいいなアドバイスが必要であった。例えば、「1つではなく2つの対比だからこそ工夫したところは?」「2つの対比を使った説明で気をつけたところは?」などを示す必要があったのではないかと考える。2つ目は、

2つの対比のうち日本の昔と現代の対比を日本の現代にだけ目をむけて考えるパターンである。その結果「人の考えや行いが変化する。」という視点が抜けがちになる。4班を含め、複数の班でこの傾向が見られた。4班の「あえて昔の日本とヨーロッパを対比することで、現代の日本のオオカミに対する見方を明確にしている。」という言葉の後に「日本の現代と昔の比較も意識してまとめてみよう。」というアドバイスが必要であったのではないかと考える。

4-3 [分類]と[話し合い]の接続について

[分類]を行って[話し合い]に進む際に、次のような手だてをとっておくことも考えられた。「オオカミを見る目」の本文を使い、「日本とヨーロッパの比較」の部分と「日本の現代と昔の比較」の部分それぞれを色を変えて、枠囲みにする方法である。これを行うことで、黒板の4象限図で横と縦に示された2つの対比が、文章上で横一列で表され、特に本論・結論部分での2つの対比の順序性が明確に見えてくる。

5. 終わりに

『筆者の述べ方の工夫』を探る方法として言葉の分類が有効であったか。」について授業の振り返りを行ってきた。言葉の分類を行うことで、対比の内容や順序といった筆者の述べ方の工夫をつかみ、そこから筆者の物の見方・考え方へつなげることができた。筆者の述べ方の工夫を探る方法として言葉を分類していく方法は有効であったと言える。ただ、今回は、筆者の物の見方・考え方を参考に、述べ方の工夫を掴んでいくという逆の流れになった感もあった。述べ方の工夫をしっかりと押さえた上で、筆者の物の見方・考え方にどうつなげていくかが反省点として挙げられる。具体的には、大きく次のことに留意して授業を進めていくことで、文章を読むだけでは見えにくいものが見えるようになり、説明的文章の正確な読みにつながっていくと考える。

- ・ 述べ方の工夫が明らかになる言葉を分類に用いる。

(述べ方の工夫が明確になる部分の言葉に絞って分類に用いる。今回、本論部分の言葉に限定して分類を行っておくと2つの対比の順序性がより分かりやすくなった。)

- ・ 分類で用いる表の見方を理解させる。

(4象限図の中に2つの対比が組み込まれているような複雑な分類の場合、表の見方をていねいに教えておく必要がある。今回、4象限図の左下の部分が、縦軸にも横軸にも関わっていることを確認して進めていけば、2つの対比をより強く意識した話し合い活動ができたと考える。)

- ・ 述べ方の工夫を掴むためのポイントを意識して授業を進める。

(述べ方の工夫をつかませる材料として、何に注目させるべきか明確にしておくことが大切である。今回、単なる対比ではなく2つの対比が用いられていることを強調しておくこと、対比に隠された順序性に気づきやすかったのではないかと考える。)

〈参考文献〉

- 1) 藤田伸一 『論理的思考力を育てる説明文の授業』 学事出版 2009.
- 2) 佐藤明宏 『国語科研究授業のすべて』 東洋館出版社 2012.